

きにわたって一貫して拡大をつづけており、その間、新たに一八〇〇万人の雇用を創出した。膨らんだ財政赤字や対外債務といった双子の赤字だけを取り上げて、レーガン大統領の経済政策はすべてまやかしてあつて、砂上の楼閣だという議論は、この事実を過小評価しているといわざるをえない。

アメリカが、いまなお高等教育や基礎的な研究開発の分野で、世界を一步も二歩もリードしているのは周知のことである。しかも、広大な土地と豊富な資源に恵まれ、過去からの遺産もある。社会はきわめてダイナミックで、政治は安定している。そのアメリカが、いま記録的な成長を遂げつつ、教育や研究開発に投資し、インフラを整備し、設備投資を行なつて将来に備えるだけの力をつけているという事実に着目すれば、九〇年代に向けて、アメリカ経済の潜在的な力は、増しこそすれ、決して減退してはいないといふべきである。麻薬はじめ、いろいろの問題に直面していることは事実だが、これを乗り越えるだけの底力をもっている。

「ボックス・アメリカーナ、マークII」

にもかかわらず、今日、一部にはボックス・アメリカーナの崩壊を取り沙汰する向きもある。日本でも、ボックス・コンソルティス（共同統治による平和）ということがいわれだした。だが、これも十分注意して使う必要がある。部分的な局面では、世界が協調して問題の処理に取り組むケースも考え

正しいのはつねに自分で、何か問題があれば、それは相手が不正だからだというのには、「天動説」以外の何ものでもない。他の国々の抬頭を不安定要因と見るのではなく、自らをサポートする力が加わつたのだと考えれば、アメリカを中心し、世界をより安定的に運営していく体制ができて上がるはずである。

九〇年代の日米関係を展望するとき、関係が親密になればなるほど、いろいろな問題が起つてくるのは、むしろ当然であろう。ただ、その際、忘れてはならないのは、為替のいたずらで、アメリカの目には日本が急速に大きく映りだしている事実である。一九八二年から今日までをとると、日米それぞれの実質経済成長率は奇しくも二一・五%と同じである。にもかかわらず、ドルという眼鏡を通して見ると、この間アメリカの三割程度の大ききだつた日本が、いまや六割にもなっている。この認識のギャップを肝に銘じることが、日本に

うるが、世界的な構図からいえば、政治・軍事・経済のいずれをとつても、アメリカ以外に、グローバルな問題処理に主導権をとりうる国は見当らないからだ。

経済についていえば、たしかに一九五〇年代、六〇年代に圧倒的な力を誇つていたころにくらべると、アメリカの相対的な地位は小さくなった。だが、それは、ヨーロッパなり、日本が、戦争の傷跡を癒して経済的に強くなり、さらにはアジアNIEsなども独り立ちしはじめたがゆえであつて、それはアメリカ自身が望んだことでもある。アメリカが衰退したわけではなく、他の国々が大きくなった結果、相対的にパランスの変化が生じたにすぎない。アメリカは現に強いし、九〇年代も強くあるべきだと私は思っている。

ただ、アメリカの力が圧倒的だったときは、何ごとともアメリカの独自の判断と費用で、自らの責任において世界を取り仕切ることが可能だったし、能率的でもあつた。しかし今日、力をつけた他の国々が、それなりにアメリカをサポートしていく必要がある。また、その準備もある。これは「ボックス・アメリカーナ」の崩壊ではなく、いわば「ボックス・アメリカーナ、マークII」への変質と捉えるべきである。

各国は、この変質した体制に、まだ十分習熟していない。アメリカも、すでに独りで差配しているわけではないのだから、黙つてついて来いという態度ではなく、仲間と相談し、頼むべきことはきちんと頼むところまでに成熟してほしい。

はまず必要だろう。

「緩やかな同盟」への中ソ接近



なかじま みのお
中嶋 嶺雄
●東京外国語大学教授

一九八八年五月のレーガン米大統領初訪ソによる米ソ首脳会談は、INF（中距離核戦力）全廃条約の調印という画期的な成果をもたらしたのみならず、第二次世界大戦後の半世紀にもわたつた米ソ冷戦体制を大きく修正する歴史的な和解であつた。二十世紀を象徴する最大の出来事が「世界大戦」と「社会主義革命」であつたとするならば、「戦争」と「革命」によってそれぞれ超大国の座を占めた米ソ両国は、い

タリ **7**

ニュースがリアルで美しい。



連日カラ一紙面

タリ **7**

ま、バックス・アメリカナとバックス・ソビエチカの「解
体」に当面して、歴史的な和解へと相互協力せざるをえなく
なりつつあるのだといえよう。

このような米ソ関係が国際政治の基軸であることからすれ
ば、ソ連と中国という社会主義両大国の関係は、ある意味で
サブ・システムだと見なさざるをえない。しかし、中ソの一
枚岩的団結という戦後世界的な神話の崩壊によってもたらさ
れた中ソの論争・対立は、これまた三十年前後にも及ぶ歴史
的過程であるばかりか、そのドラマチックな衝撃性と国際政
治上の影響力という点では、米ソ関係にも劣らぬインパクト
をわれわれの同時代史に与えつつづけてきたのであった。

そのような中ソ関係に、いま、大きな歴史的転機が訪れよ
うとしている。一九八九年のかなり早い時期に、いよいよ中
ソ首脳会談が開催されようとしているのであり、しかもゴル
バチョフ書記長と鄧小平主席（党中央軍事委）という世紀の
「千両役者」によって、いよいよ中ソの国際政治上の対立・
抗争に終止符が打たれようとしているのだ。

そのような中ソ首脳会談への「瀬踏み」は、この間、一歩
一歩と進行してきている。論理的にこのプロセスを見てみる
と、ソ連を「社会帝国主義」「覇権主義」と規定して戦路上
の「敵」と見なした毛沢東体制が名実ともに崩壊し、非毛沢
東化が開始された七〇年代末以降、中ソ和解への歴史的な歩
みが内部的に始まっていたのであり、中国側のいわゆる「三

存・相互補完関係の強さから見ても、今後、著しく発展する
であろう。

同時に、ベレストロイカを進めつつあるソ連と、改革・開
放戦略を進めつつある中国との共通基盤・共通項は、ともに
内部的な抵抗や宿命的な民族問題などを抱えているだけに急
速に拡大しつつあり、社会主義経済の長期的な困難と停滞
も、両者の相互依存・相互補完関係を強化せずにはおこな
ない。この点では、ソ連という「硬構造社会主義国」と中国と
いう「柔構造社会主義国」の提携は、両者にとっていまや不
可欠だとの認識が中ソ双方で急速に深まっている。私は、こ
の夏から秋にかけての訪中および訪ソによって、そのことを
具体的に再確認することができた。

こうして、中ソ関係は、一九九〇年代に大きな構造的変化
を見せるだろうことは疑えず、このような中ソ関係を基軸に
して、社会主義諸国間関係も徐々に再編成されてゆくであろ
う。中ソ両国は、一方で西側諸国と交流を深めながら、社会
主義の歴史的崩壊過程を延命させるためにも、相互に協力せ
ざるをえないのであり、国際政治の舞台では一種の「緩やか
な同盟」関係を形成してゆくものと思われる。

こうして、米ソ関係に次ぐ中ソ関係の新展開によって、日
本はいまや米・中・ソ三大国から叩かれ挟撃される経済大国
として、国際的にさらに孤立化することになるかもしれないな
らう。

大障害」は、中ソ和解への内在的過程から照射すれば、実は
そのようなプロセスを西側に衝撃緩和するための外交戦術で
しかなかったのだが、ソ連側では、とくにゴルバチョフ登場
以来、一九八六年七月のウラジオストク演説、この九月中
旬のクラスノヤルスク演説を経て、中ソの歴史的和解への土
壌は完全に固まっていた。

「中ソ同盟」を基軸とした再編がはじまる

去る十月三日、ゴルバチョフ書記長のソ連最高会議幹部会
議長就任への中国政府の鄭重な祝賀電報は、一九六〇年代初
頭の中ソ論争公然化以来のものであったし、次いでこの十月
末には、懸案の中ソ国境交渉でかつて「中ソ戦争」（一九六九
年）の磁場となった「珍宝島」「ダマンスキー島」の中国掃蕩
が明らかになり、こうして中ソ双方は、この十二月初旬の鑑
其琛外相訪ソによる外相会談によって、いよいよ中ソ首脳会
談の具体的日程を詰めることになるであろう。

この間、中国とソ連を結ぶ最短距離の第三の鉄道「北疆鉄
道の建設は、すでに一九九一年の全線開通をめざしてソ連の
全面的資金援助（第二期工事分四億五〇〇〇万元）と技術協力
を得て急ピッチで進行しつつあり、中ソ間の経済協力、貨物
輸送、人的交流（とくに中国からの労働力の大量移世）、そして
当然のことながら中ソ間貿易の拡大は、社会主義先進工業国
ソ連と社会主義発展途上大国中国という社会構造上の相互依

「年功序列」政治の二長二短



飯島 清
いじま きよし
●政治評論家

九〇年代の日本政治を占う鍵は、まず自民政権がつづく
かどうかであろう。結論からいえば、私はこの時期、自民政
党から野党に政権が移る可能性はないと思っている。

それは一つには、選挙区制度がいまの中選挙区制のまま
あるかぎり、野党が多党化状態を脱するのは、まず不可能だ
からだ。もし小選挙区制のもとで、リクルート事件のような
スキャンダルが起れば、政権がひっくり返る可能性は十分に
ある。また、本格的に労働界の再編が進めば、連動して野党
再編・集約化の動きが起り、政権交代の可能性が出てきても
おかしくない。にもかかわらず、自民政権が揺るがないの
は、中選挙区制が自民政権を制度的に支えているからであ
る。率直に言って、野党がいまのように小選挙区制の導入を
恐れているあいだは、自民政権がつづくだろう。

第二に、では、野党に体質転換を期待できるだろうか。か
つて野党が多党化する以前の五五年体制のころは、少なくとも
も社会党には、当時の自民党を上回るような魅力をもった政